

『聲聞地』と『法蘊足論』の関連性：
止觀を中心として

阿 部 貴 子

『聲聞地』と『法蘊足論』の関連性： 止観を中心として

阿 部 貴 子

はじめに

初期瑜伽行派の論書『瑜伽師地論』(*Yogācārabhūmi*)は、概して説一切有部のなかで活動していた瑜伽行者 *yogācāra*、あるいは彼らと密接な関係にあった人々によって作成されたといわれている¹。とりわけその最初期の章「聲聞地」(*Śrāvakabhūmi*, 以下『聲聞地』)は、ヨーガの體系や理論を詳説する。ではその體系や理論に影響を与えたものは何であろうか。

すでに『聲聞地』が、五停心観（不淨観・慈愍観・緣性緣起観・界差別観・入出息念）を説く衆護 *Samgharakṣa* 作『修行道地經／瑜伽遮復彌經』（竺法護譯, T. 606）や、馬鳴 *Aśvaghoṣa* 作『サウンダラナンダ』(*Saundarananda*)の影響を受けていることは知られている²。また『婆沙論』『法蘊足論』『集異門足論』と部分的に共通する箇所のあることも指摘されている³。だが初期の阿毘達磨文獻のうちいかなる論書と最も関連するののかといった点では、いまだ網羅的に

1 Schmithausen (1970; 1987)、榎本文雄 (Enomoto 1989) は『瑜伽師地論』「思所成地」の引用經典が有部のものであること、向井亮 (1985) は「攝事分」の引用經典が有部のものであることを明らかにしている。山部能宜 (Yamabe 2003, 225) は、瑜伽行派成立以前、すでに瑜伽行者 *yogācāra* と呼ばれる修行者たちが説一切有部の内部に存在していたと述べている。また Deleanu (2006, 161-162) もこうした有部の瑜伽行者と關係し、有部の經と律をもって著作活動をするようになった人々から『聲聞地』が作成されたと見ている。その他、佐久間秀範 (2009, 31) も参照。

2 『修行道地經』との關連については、Demiéville (1954)、荒牧典俊 (1971; 1983)、毛利俊英 (1987a; 1987b)、小谷信千代 (1995; 1996; 2000)、山部能宜・藤谷隆之・原田泰教 (2002)、山部能宜 (Yamabe 2003)、Deleanu (2006) を参照。『サウンダラナンダ』に關しては松濤誠康 (1954/1981)、山部能宜・藤谷隆之・原田泰教 (2002)、山部能宜 (Yamabe 2003) を参照。

3 釋惠敏 (1994)、松田愼也 (1989)、Kritzer (2017)、石田一裕 (Ishida 2017) に指摘されている。

考察されていない。そこで改めて『法蘊足論』を概観すると『聲聞地』と極めて近い所説のあることが見えてきた。そのため本稿では『法蘊足論』との関連について考察し、『瑜伽師地論』の成立背景を解明するための一助としたい。

『法蘊足論』は周知のように『集異門足論』と並んで第一期の阿毘達磨論書に位置づけられ、南傳系とされる *Vibhaṅga* (『分別論』) および法藏部所傳とされる『舍利弗阿毘曇論』と近似性のあることが指摘されている。特に *Vibhaṅga* とは共通する章品も多く、山田龍城 (1959, 69-80)⁴ や、田中教照 (1993, 207-220) によって比較考察が行われている。しかしながら『法蘊足論』がこれらの論書や他の有部の阿毘達磨論書と決定的に異なる点がある。それは「修行段階論」とも稱せられるように⁵、一人の求道者の出家から修行を成就するプロセスをその構成上の骨子にしていることである。そこで、本稿では特に『聲聞地』の修行法の中心である止觀に焦點を當てて兩者の所説を考察したい。

まず簡単に『法蘊足論』と『聲聞地』の章構成を挙げると以下の通りである。

『法蘊足論』

I. 學處から阿羅漢果 (T. 453b27-466b14)

1. 學處品 2. 預流支品 3. 證淨品 4. 沙門果品 5. 通行品

II. 修行方法の説明 (T. 466b15-494b29)

6. 聖種品 7. 正勝品 8. 神足品 9. 念住品 10. 聖諦品

11. 靜慮品 12. 無量品 13. 無色品 14. 修定品 15. 覺支品

III. 諸法の説明 (T. 494c1-513c11)

16. 雜事品 17. 根品 18. 處品 19. 蘊品 20. 多界品 21. 緣起品

4 山田龍城 (1959, 70-72) は『法蘊足論』を紀元前2世紀～紀元後1世紀頃の成立と見なす。『法蘊足論』が「學處品」から開始するのに對して、*Vibhaṅga* は「蘊品」「處品」「界品」、『舍利弗阿毘曇論』は「入(處)品」「界品」「陰(蘊)品」と次第しており、『法蘊足論』がこのうち最も古い形を有していると述べている。

5 和辻哲郎 (1962, 320) は『法蘊足論』を「修道に關してブツダが説いたとせられている法を體系的に整理する」とし「修行段階論」であると稱している。櫻部建 (1969/1975, 49)、田中教照 (1993, 224-226) もこの見方を概ね支持している。

『聲聞地』と『法蘊足論』の関連性：止観を中心として（阿部）

『聲聞地』

「第一瑜伽處」（ŚrBh I）：聲聞の種姓、比丘の生活と修行の全體像を説く。

「第二瑜伽處」（ŚrBh II）：特に止と觀（五停心觀）の個々の所縁、三十七菩提分法を説く。

「第三瑜伽處」（ŚrBh III）：瑜伽行者としての入門、止と觀（五停心觀）の獨自の方法、止観による身心輕安の獲得を説く。

「第四瑜伽處」（ŚrBh IV）：世間道、出世間道の段階を示す。

このうち『法蘊足論』では、下線部で示したように、「正勝品」で四正勝、「神足品」で四神足、「念住品」で四念住、「覺支品」で七覺支、「根品」で五根五力を説き、八正道を除く菩提分法を個別に詳述している。また太字の「念住品」で不淨觀、「無量品」で四無量心、「多界品」で六界、「緣起品」で緣起というように、入出息念以外の五停心觀に相應する説明も行っている。一方の『聲聞地』も「第二瑜伽處」「第三瑜伽處」で五停心觀と三十七菩提分法を詳しく論じている。

もちろん『聲聞地』の構成は『法蘊足論』と完全に一致するものではないが、『修行道地經』や『サウンダラナンダ』に菩提分法が詳説されていない點を鑑みると、五停心觀と菩提分法の兩方を説く點で『法蘊足論』とも近いことを想定してよいだろう。

1. 「第一瑜伽處」から「第二瑜伽處」の連續性について

では、「第一瑜伽處」から「第二瑜伽處」の連續性という觀點でもう少し詳しく見ていこう。

『聲聞地』「第一瑜伽處」の構成は、先學によって『中部經典』「大馬邑經」（*Mahāssapurasutta*, MN I, 39）「小象跡喻經」（*Cūḷahatthipadopamasutta*, MN I, 27）および『サウンダラナンダ』『成實論』と近似することが明らかとなっている。また『長部經典』「沙門果經」（*Sāmāññaphalasutta*, DN I, 2）とも一致している。おそらく「第一瑜伽處」はこうした初期經典の經文に基づき『サウンダラナンダ』の影響も受けつつ、その構成を定めたのであろう。しかしこれらの文

獻には、「第一瑜伽處」に對應する内容から「第二瑜伽處」に對應する内容へと接續する所説が見られず、そのため兩者の内容は分離しているような印象を受ける。しかし『法蘊足論』を見るとその連續性が示されていることが分かる。

以下の表は、すでに發表されている『聲聞地』『第一瑜伽處』と『サウンダラナンダ』および「大馬邑經」「小象跡喻經」の對照表（山部能宜・藤谷隆之・原田泰教 2002, 44-50）と、『聲聞地』と『サウンダラナンダ』『成實論』の對照表（Yamabe 2003, 250）を用いたものであり⁶、今回新たに『法蘊足論』を追記し、全體の構成を見てみたい。網掛け部分は前出の初期經典と一致する。なお、個々の項目のロケーションはすでに上記論文に提示されているため、煩瑣を避けて一部を除き省略した。

[表 1]

第一瑜伽處 ŚrBh I, 10-23 A. 種姓地	第一瑜伽處 ŚrBh I, 62-295 C. 出離地	法蘊足論 「覺支品」 492a4-10 ⁷	SauN	成實論 351a19-23 ⁸ ; 351a23-355c14
1) 自圓滿 ātmasaṃpad	1 自圓滿 ātmasaṃpad			
2) 他圓滿 paraṃsaṃpad	2 他圓滿 paraṃsaṃpad			
3) 善法欲 kuśalo dharma- cchandaḥ	3 善法欲 kuśalo dharma- cchandaḥ		dharmacchanda 12. 31	
4) 正出家 pravrajyā				
5) 戒律儀 śīlasaṃvara	4 戒律儀 śīlasaṃvara	1 三妙行 2 三善根 3 十善業道	śīla 13. 10-29	1 清淨持戒 2 得善知識
6) 根律儀 indriyasaṃvara	5 根律儀 indriyasaṃvara	9 密護根門	indriyasaṃvara 13. 30-56	3 守護根門
7) 食於知量 bhojane mātrajñatā	6 食於知量 bhojane mātrajñatā	10 飲食知量	bhojane... mātrajñatā 14. 1-19	4 飲食知量
8) 覺悟瑜伽 pūrvārātrāpara- rātraṃ jāgari- kānuयोगaḥ	7 覺悟瑜伽 pūrvārātrāpara- rātraṃ jāgari- kānuyuktatā	11 初夜後夜曾 不睡眠	vidhūya nidrāṃ yogena 14. 20-34	5 初夜後夜損於 睡眠

『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性：止觀を中心として（阿部）

9) 正知而住 saṃprajānad- vihāritā	8 正知而住 saṃprajānad- vihāritā	12 勤脩諸善？	saṃprajānan... smṛtim ādhātum 14. 35-45	
10) 樂遠離 prāvivēkya			viveka 14. 46-52	
11) 清淨諸蓋 nivarāṇa- viśuddhi				
			vitarkaprahāṇa 15. 3-63	6 具足善覺
12) 依三摩地 samādhisam- niśraya 初靜慮 prathama- dhyāna 第二靜慮 dviṭīya-dhyāna 第三靜慮 tṛtīya-dhyāna 第四靜慮 caturtha- dhyāna			dhyāna... prathama 17. 41-46 dviṭīyaṃ dhyānaṃ 17. 47-49 dhyānaṃ tṛtīyaṃ 17. 50-53 dhyānaṃ caturtham 17. 54-57	
				7 具善信解 9 具解脫處
	9 善友性 kalyāṇamitratā	4 親近善士 「預流支品」 458b28-459c14 (1) 親近善士		10 無障礙 355b17-18 (1) 親近善人
	10 聞思正法 saddharma- śravaśacintanā	5 聽聞正法 (2) 聽聞正法		(2) 喜聽正法
	11 無障 anantarāya			
		6 如理作意 (3) 如理作意		(3) 自正憶念
		7 法隨法行 (4) 法隨法行		(4) 能隨法行

		8 恭敬聽聞		
	12 惠捨 tyāga			11 不著
	13 沙門莊嚴 ⁹ śramaṇa- ālaṃkāra (1) 正信 (2) 無諂 (3) 少病 (4) 精進 (5) 慧 (6) 具少欲 (7) 喜足 (8) 易養 (9) 易滿 (10) 杜多德 (11) 端嚴 (12) 知量 (13) 善士法 (14) 具聰慧者 相 (15) 忍 (16) 柔和 (17) 賢善	「聖種品」 467a2-5 ¹¹ 少欲 喜足 易養 易滿 杜多功德 於諸資具 能善知量 13 四念住 14 四正勝 15 四神足 16 五根 17 五力 18 七等覺支 19 八支聖道 20 四正行 21 四法迹 22 奢摩他毘鉢 舍那		8 具行者分 ¹⁰ 354c14-15 (1) 有信 (2) 心不諂曲 (3) 少病 (4) 精進 (5) 智慧

6 山部能宜・藤谷隆之・原田泰教（2002）は12) 依三摩地まで、山部能宜（Yamabe 2003）は10) 樂遠離までを比較している。

7 『法蘊足論』492a4-10: 云何應脩法。謂 1 三妙行、2 三善根、3 十善業道、4 親近善士、5 聽聞正法、6 如理作意、7 法隨法行、8 恭敬聽聞、9 密護根門、10 飲食知量、11 初夜後夜

『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性：止觀を中心として（阿部）

以上を見ると、「第一瑜伽處」種姓地に示された項目、すなわち 1) 自圓滿～12) 依三摩地までの「小象跡喻經」「大馬邑經」「沙門果經」に基づいた項目は、先行研究で指摘されるように『サウンダラナンダ』の構成と極めて近いことが分かる。一方、「第一瑜伽處」出離地の全體に互って説かれる内容、すなわち 1 自圓滿～13 沙門莊嚴も一つのまとまった構成となっており、『法蘊足論』に見られる項目と近似している。また『成實論』は『サウンダラナンダ』『法蘊足論』と近く、著者ハリバルマンはこれらの文獻の内容を知っていたと推測できる。

さて「第一瑜伽處」と「第二瑜伽處」の連續性についてであるが、前述したように『聲聞地』では「第一瑜伽處」で比丘としての生活や一般的な修行を示し、「第二瑜伽處」では主に五停心觀の所縁と三十七菩提分法の方法を説明している。つまり「第一瑜伽處」と「第二瑜伽處」とではテーマが大きく異なっており、そこに内容上の隔たりが見受けられた。だが『法蘊足論』を見ると、「第一瑜伽處」に對應する 1 三妙行～12 勤脩諸善に續いて、13 四念住、14 四正勝、15 四神足、16 五根、17 五力、18 七等覺支、19 八支聖、20 四正、21 四法迹、22 奢摩他毘鉢舍那を列挙している。つまり、「第二瑜伽處」に説

曾不睡眠、12 勤脩諸善。是名應脩法。復次 13 四念住、14 四正勝、15 四神足、16 五根、17 五力、18 七等覺支、19 八支聖道、20 四正行、21 四法迹、22 奢摩他毘鉢舍那。亦名應脩法。（番號：筆者）

8 『成實論』351a19-23: 定具者、謂十一法。一清淨持戒、二得善知識、三守護根門、四飲食知量、五初夜後夜損於睡眠、六具足善覺、七具善信解、八具行者分、九具解脫處、十無障礙、十一不著。なお『成實論』の具足善覺は『サウンダラナンダ』の vitarkaprahāṇa の六種尋思に對應し、山部能宜（Yamabe 2003, 251）は兩箇所と『坐禪三昧經』および『聲聞地』『第三瑜伽處』（ŚrBh III, 92-95）の尋思との關連を指摘している。ただし「第三瑜伽處」（ŚrBh III, 124-125）では八種の尋思に言及し、『菩薩地』『戒品』は尋思として、欲・恚・害・親里・國土・不死・輕侮相應・族姓相應の八種を擧げる。この八種は『法蘊足論』『雜事品』のものと一致する（494c13-14）。

9 ŚrBh I, 268-269: śramaṇālaṃkāraḥ katamaḥ / tadyathāikatyāḥ ⁽¹⁾śrāddho bhavati, ⁽²⁾aśaṭhaḥ, ⁽³⁾alpābādhaḥ, ⁽⁴⁾ārabdhavīryajātīyāḥ, ⁽⁵⁾prājñāḥ, ⁽⁶⁾alpecchāḥ, ⁽⁷⁾saṃtuṣṭāḥ, ⁽⁸⁾supoṣaḥ, ⁽⁹⁾subharaḥ, ⁽¹⁰⁾dhutagaṇasamanvāgataḥ, ⁽¹¹⁾prāsādikāḥ, ⁽¹²⁾mātrajñāḥ, ⁽¹³⁾satpuruṣadharmaśamanvāgataḥ, ⁽¹⁴⁾pañḍitaṅgaśamanvāgataḥ, ⁽¹⁵⁾kṣamaḥ, ⁽¹⁶⁾sūrataḥ, ⁽¹⁷⁾peśalaś ca bhavati //

10 『成實論』354c14-15: 一謂有信、二謂心不諂曲、三謂少病、四曰精進、五名智慧。

11 『法蘊足論』467a2-5: 少欲・喜足・易滿・易養、損滅諸惡、增長諸善、能速圓滿、杜多功德、於諸資具、能善知量、能令自他身心嚴淨。

かれる五停心觀の箇所を除くと、「第一瑜伽處」「第二瑜伽處」と同様のプロセスが見られるのである。

また論全體の構成としても、『法蘊足論』では佛弟子としての學處を説き（學處品）、續いて比丘の進むべき道程を示し、その後に種姓を説き（聖種品）、一連の菩提分法と止觀を擧げる（正勝品～覺支品）。田中教照（1993）が指摘するようにこの構成は *Vibhaṅga* や『舍利弗阿毘曇論』には無い獨自のものである。『聲聞地』もまた、般涅槃の種姓を持ったものが出家をして比丘となり、相應しい行爲を具え（第一瑜伽處）、五停心觀と菩提分法を實踐することを説く（第二瑜伽處）のであり、したがって兩論の作成の背景には共通した意圖があったように思われる。

2. 止觀に関する共通性

さらに『法蘊足論』に注目する點として、他論には見られない『聲聞地』との文言の極似が擧げられる。まず、「第二瑜伽處」における菩提分法の説明のうち、受念處、心念處、法念處、四正斷、四神足の箇所で文言の一致が見られること、「第二瑜伽處」「第三瑜伽處」の五停心觀に関しては、不淨觀における不淨 36 種の項目の近似や、慈愍觀で引用する經文の一致、緣性緣起觀で引用する『緣經』(*Pratītya*)と『緣起經』(*Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśasūtra*)¹²の文言の一致や、本無今有説の共通性が確認できる。そして界差別觀で引用する『中阿含經』「界分別經」に関する所説の一致も指摘することができる。

これらの細かいパラレルや共通點については別稿に譲ることとし、ここでは『聲聞地』の特徴と見なされてきた止觀の定義、麁重と輕安、名稱の觀察、光明想の位置付けについて、『法蘊足論』を考察してみたい。なおサンスクリット部分については Dietz (1984) および松田和信 (Matsuda 1986) を参照し、そのほかは玄奘譯 (T. 1537) による。

12 『緣經』は *Nidānaśamyukta* 14、『雜阿含經』296 經と相應する。『緣起經』は *Nidānaśamyukta* 16、『雜阿含經』298 經、玄奘譯『緣起經』T. 24 (Tib. D. 211, P. 877) に相應する。

(1) 止・觀の定義

『聲聞地』の特徴は、止觀の方法とそれによる身心の變化を説くことである。「第二瑜伽處」では止觀の所縁を定義し、それぞれを無分別影像と有分別影像とに區別し、止 śamatha の九種心住 navākāra と、觀の行相 vipaśyanākāra（四種觀察）を説明する。このうち九種心住は以下の通りである。

ŚrBh II, 44-45: nirvikalpaṃ pratibimbaṃ katamat / ... api tu tad evāmbanam amukto śamathākāreṇa tac cittaṃ śamayati / yaduta navākārayā cittasthityādhyātmam eva cittaṃ sthāpayati, samsthāpayati, avasthāpayati, upasthāpayati, damayati, śamayati, vyupaśamayati, ekotīkaroti, samādhatte /

無分別の影像とは何か。…しかしまた、その同じ所縁を捨てずに、止の行相によってその心を寂靜にする。それは、心を住させる九つの行相によってである。つまり心を内に住させ、等住させ、安住させ、近住させ、抑制し、靜め、寂靜にし、一境にさせ、定める。

この九種心住は『阿毘達磨集論』や『大乘莊嚴經論』、カマラシーラ著『修習次第』に示され¹³、いずれも『聲聞地』を根據とすることが窺える。しかしこの九種は『法蘊足論』に散見される文言に基づいて構成されていると考えられる。例えば『法蘊足論』「無量品」には以下の箇所がある。

DhskD, 85: ebhiḥ parīttaiḥ satvaih parīttaṃ maitrīśābhabhavaṃ cittaṃ āsthāpayaty upasthāpayati damayati śamayati¹⁴ vyupaśamayati ekotīkurute samādadadhāti.

彼はそれら僅かな人々に對して僅かな慈に伴った心を、住させ、近住さ

13 九種心住はチベットの牧象圖としても知られている。ツォンカバ著『ラムリムチェンモ』では九種心住を『聲聞地』に基づくと述べる。ツルティム・ケサン・小谷信千代（1991）參照。中國や新羅における九種心住の解釋については Cha（2013）に詳しい。

14 Ms. śanayatu. Dietz suggests śamayati from Ch.

せ、抑制し、静め、寂靜にし、一境にさせ、定める。

『法蘊足論』「無量品」486a22-24: 彼は是の如きの狭小の有情に於いて、
狭小の慈俱心をして住・等住・近住・安住・調伏・寂靜・最極寂靜・一
趣・等持せしめる。

これらを照合させると次の通りとなろう。

[表 2]

『聲聞地』(左: 玄奘譯 427b19-20)	『法蘊足論』(左: 玄奘譯)
①内住 adhyātmam eva cittaṃ sthāpayati	住 āsthāpayati
②等住 samsthāpayati	等住
③安住 avasthāpayati	安住
④近住 upasthāpayati	近住 upasthāpayati
⑤調伏 damayati	調伏 damayati
⑥寂靜 śamayati	寂靜 śamayati
⑦最極寂靜 vyupaśamayati	最極寂靜 vyupaśamayati
⑧一趣 ekotīkaroti	一趣 ekotīkurute
⑨等持 samādhatte	等持 samādadhāti

『法蘊足論』の梵文テキストには抜けている項目がある。漢譯時に見ていた原文には有った可能性もあるが、玄奘が譯文の一貫性などの爲に加えたとも考えられる。ちなみに *Vibhaṅga* と『舍利弗阿毘曇論』にも近い語句が列擧されるが、これほどまで一致してはいない¹⁵。

續いて『聲聞地』は、觀の四種觀察について以下のように示す。

15 『舍利弗阿毘曇論』568b23-26: 云何定覺…心住・正住・專住・心一向・心一樂・心不亂・依意心獨・定根・定力・正定。

Vibhaṅga, 217: yā cittassa ṭhiti saṇṭhiti avaṭṭhiti avisāhāro avikkhepo avisāhaṭamānasatā samatho samādhindriyaṃ samādhibalaṃ sammāsamādhī, ayaṃ vuccati samādhī.

なお、『増支部經典』「金工師經」にも近い表現がある。

Suvaṇṇakāra, AN I, 254. 31-32: hoti so bhikkhave samayo yaṃ taṃ cittaṃ ajjhantaṃ yeva santiṭṭhanti sannisīdati ekodihoti samādhīyati. (比丘たちよ、彼は心を内に住させ、等住させ、一境に住させ、等持させる。)

『聲聞地』と『法蘊足論』の関連性：止観を中心として（阿部）

ŚrBh II, 42-43: tatra savikalpaṃ pratibimbaṃ katamat / yathāpīṭhaikyāḥ
saddharmaśravaṇaṃ vāvavādānuśāsanīm vā niśritya, dṛṣṭaṃ vā,
śrutaṃ vā, parikalpitaṃ vopādāya jñeyavastusabhāgaṃ pratibimbaṃ
samāhitabhūmikair vipaśyanākārair vipaśyati, vicinoti, pravicinoti,
parivitarkeyati, parimīmāṃsām āpadyate /

このうちで有分別影像とは何か。例えばここにある者がいて、正法を聴聞すること、あるいは教授教誡に依止して、見たり聞いたりあるいは分別したものについて、知られるべき事柄と同分の影像を、定地に属する観の行相によって観察し、思擇し、簡擇し、尋思し、思惟する。（玄奘譯 427b1: 簡擇、極簡擇、遍尋思、遍伺察）

この箇所についても、『法蘊足論』に次のような所説が見られる。

『法蘊足論』「覺支品」492a15-16: 如實の正慧を以て、簡擇し、極簡擇し、遍尋思し、遍伺察し、審諦伺察す。¹⁶

以上から『聲聞地』の止観の定義として廣く知られている九種心住と四種觀察の原型は、すでに『法蘊足論』に説かれていたことが分かる。

(2) 麁重と輕安

次に『聲聞地』の特徴の一つである麁重 *daṣṭhūlya* と輕安 *praśrabdhi* について見てみよう。麁重とは重苦しさや不快感のことであり、輕安は輕快さや快適さのことであり、「第三瑜伽處」では止観によって身心の麁重を斷じて、身心の輕安を得ることを詳述している。ここに一節を引用すると次の通りである。

16 『法蘊足論』 492a15-16: 以如實正慧、簡擇、極簡擇、遍尋思、遍伺察、審諦伺察。
これとは異なる箇所もある。

『法蘊足論』 474c14-17: 此中觀者、謂依出家遠離所生善法所起、於法簡擇、極簡擇、最極簡擇、解了、等了、近了、機點、通達、審察、聰觀、覺明慧行、毘鉢舍那、是名觀。

ŚrBh III, 170-171: tasyānantarotpādād yat prahāṇarativibandhakāriṇām
kleśānām pakṣyaṃ cittadauṣṭhulyaṃ tat prahīyate / tatpratipakṣeṇa ca
cittakarmaṇyatā cittaprasābdhir utpadyate /

その〔観察すべき相〕は間斷なく生ずるため、斷の樂の妨げをなす煩惱に
屬する心の龜重なるものは斷じられる。そして、その對治により、心の堪
能性、心の輕安が生ずる。

そして、心のみならず身體の龜重を斷じて輕安を獲得することを詳述し、輕
安をしばしば堪能性 karmaṇyatā（よく機能する状態）とも表している。初期經
典にも龜重が鎮靜する prati-pa-√śrambh という表現が散見されるが¹⁷、輕安
は概して輕安覺支と同一視され龜重とは結びつけられていない。そのため龜重
から輕安への移行を説くことは『聲聞地』の特徴とも言われているが、すでに
佐久間秀範（Sakuma 1990a, 34-35）も指摘するように、『法蘊足論』に極めて興
味深い箇所がある。『法蘊足論』「覺支品」の輕安覺支では、以下のように、輕

17 「第三瑜伽處」が實踐的觀點により龜重から輕安への移行を説く一方で、「第二瑜伽處」で
は龜重の鎮靜 prati-pa-√śrambh による轉依を示し輕安の獲得を説いていない。そもそも初
期經典から、輕安は靜慮における喜 prīti と樂 sukha を表すが、喜樂を完全に離れた第四靜
慮に輕安 prāsābdhi は無いとされている。つまり最終的に獲得すべき境地に、輕安はない。
「第三瑜伽處」では、まだ凡夫の段階の五停心觀を説くため身心の龜重を離れて vi-√gam
輕安を得ることを理想とする。しかし「第四瑜伽處」では、四靜慮の段階のうち初靜慮から
第三靜慮へと徐々に龜重を除き輕安を得ると説き、出世間道で金剛喻三昧を経て阿羅漢
位を獲得するときには一切の龜重の種子を根絶する sam-ud-√han と示す。これらを総合す
ると、禪定における龜重から輕安への移行を示してはいるものの、最終的に龜重が完全に
絶たれる場合には輕安獲得と表現しないということになろう。「第二瑜伽處」において輕安
の獲得を説かないのは、教理的な矛盾を回避したためとも言えるのではないだろうか。

なお、なお山部能宜（2016）は、『攝大乘論』には龜重と輕安がともに阿頼耶識の特徴
であり、それぞれ煩惱・隨煩惱の種子、有漏善の種子と示されることを指摘する。また氏
（2017）は、『瑜伽師地論』「攝事分」や「意地」では損害 upaghāta と利益 anugraha に關
する相互關係（安危同一）をもって阿頼耶識が身體を維持すると説くこと、また『顯揚聖
教論』『雜集論』では損害と利益を龜重と輕安と見なししていることを指摘し、これらが身體
を生理的に維持する阿頼耶識を成立させた思想基盤となっていると論じている。（Yamabe
2020 も参照）。

上で考察したように、『聲聞地』において靜慮の最終段階で輕安の獲得を説かないとい
う點は、山部能宜氏の結論と矛盾するものではない。むしろ阿羅漢位獲得まで龜重と輕安を
保つことが『聲聞地』にも示唆されていると見るべきではないだろうか。

『聲聞地』と『法蘊足論』の関連性：止観を中心として（阿部）
安を龐重の遠離と明示している。

『法蘊足論』「覺支品」491b23-26: 爾の時、便ち喜覺支を起し、喜覺支を得、脩をして圓滿せしむ。彼、此の喜に由りて、身心輕安、龐重を遠離せば、爾の時便ち輕安覺支を起し、輕安覺支を得。¹⁸

さらに「靜慮品」における第三靜慮までの樂 sukha を説く箇所と、「雜事品」における龐重の説明にも、以下のように示している。両者は異なる文脈ではあるが、下線部分を総合すると、輕安と龐重および堪任性（堪能性）と無堪任性（無堪能性）とが對義語として用いられていることが分かる。

『法蘊足論』「靜慮品」483c2-7: 云何が樂なるや。謂わく欲と惡不善の法を離れる者の、已に身重性、心重性、身不堪任性、心不堪任性を斷じて、得る所の身滑性、心滑性、身軟性、心軟性、身堪任性、心堪任性、身離蓋性、心離蓋性、身輕安性、心輕安性、身無焦惱性、心無焦惱性、身調柔性、心調柔性を、總じて名づけて樂と爲す。¹⁹

『法蘊足論』「雜事品」497b19-22: 云何が龐重なるや。謂わく身重性、心重性、身無堪任性、心無堪任性、身剛强性、心剛强性、身不調柔性、心不調柔性を、總じて龐重と名づく。²⁰

このように『法蘊足論』も、禪定により龐重を離れて輕安を得ることを含意している。佐久間秀範が指摘するように、それが轉依と結びつくのは『聲聞地』が初めてであろうが、『聲聞地』の作者はこのような對概念をすでに知っていたといえるだろう。

18 『法蘊足論』491b23-26: 爾時、便起喜覺支、得喜覺支、脩令圓滿、彼由此喜、身心輕安、遠離龐重、爾時便起輕安覺支、得輕安覺支。

19 『法蘊足論』483c2-7: 云何樂。謂離欲惡不善法者、已斷身重性、心重性、身不堪任性、心不堪任性、所得身滑性、心滑性、身軟性、心軟性、身堪任性、心堪任性、身離蓋性、心離蓋性、身輕安性、心輕安性、身無焦惱性、心無焦惱性、身調柔性、心調柔性、總名為樂。

20 『法蘊足論』497b19-22: 云何龐重。謂身重性、心重性、身無堪任性、心無堪任性、身剛强性、心剛强性、身不調柔性、心不調柔性、總名龐重。

(3) 名稱の觀察

止觀のうちの觀に相應する修行法が五停心觀である。『聲聞地』『第二瑜伽處』では、不淨觀やその他の五停心觀における觀察對象を阿毘達磨論書と同様に列擧する。『法蘊足論』だけでなく『婆沙論』と近い項目も多く見られる。一方「第三瑜伽處」では五停心觀を六事という『聲聞地』獨自の方法によって觀察することを説く。六事とは、觀察對象とすべき個別の相—不淨觀における髮・毛・爪など—ではなく、それを意味から觀察し（義 artha）、内・外という事柄から觀察し（事 vastu）、自相・共相から觀察し（相 lakṣaṇa）、黒品・白品から觀察し（品 pakṣa）、過去・現在・未來から觀察し（時 kāla）、四種道理から觀察する（理 yukti）ことである。このうち最も特徴的なものが理の觀察であり、觀待道理・作用道理・證成道理・法爾道理という四種道理から對象を觀察するという。このなかで觀待道理とは、假名に依據すること prajñaptyapekṣā という意味をもち²¹、あらゆる事柄は名 nāma・句 pada・文 vyañjana として成立するという道理を示す。この道理に従って、五停心觀の個々の所縁に集中したのちにそれらの所縁は、名稱 samjñā・呼稱 samajñā・假名 prajñapti・言説 vyavahāra がつくと觀察するのである。そこで、一例として不淨觀の後に説かれる理の觀察を擧げてみよう。

ŚrBh III, 44-45: katham yuktiṃ samanveṣate / tasyaivaṃ bhavati / "nāsti sa kaścīd ātmā vā sattvo vādhyātmam vā bahirdhā vopalaḥkhyo yaḥ śubho vā syād aśubho vā / api tu rūpamātram etad kaḍevaramātram etad yatreyam **samjñā samajñā prajñaptir vyavahārah**, śubham iti vā aśubham iti vā /
 どのように道理を探求するのか。彼は次のように考える。「淨であれ不淨であれ、内あるいは外に認識されるいかなる自我も實體もない。そうではなくて、單なる色に過ぎず、單なる身體に過ぎず、それにこの「淨」あるいは「不淨」という**名稱、呼稱、假名、言説**がつくのである」と。

21 歡待道理には、生起する場合の依據 utpattyapekṣā もある。所縁に對して、それが生起する因 hetu と縁 pratyaya を觀想することである。ŚrBh I, 236-239 參照。

『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性：止觀を中心として（阿部）

つまり、髪や毛といった單なる色や身體でしかないものに「不淨」といった名稱がつくに過ぎないと觀察せよと述べている。この點でも『法蘊足論』に極めて近い表現がある。そこでは様々な禪定を説いたのちに、それを「佛・佛弟子は假に名・想・言説を建立する」（= nāma, saṃjñā, vyavahāra）「名を施設する」（= prajñapti）と述べている。以下は四正勝の例であるが、そのほかに四神足、苦諦などの説明の最後にも同じ表現が認められる（481a2-4; 481c4-6）。

『法蘊足論』「正勝品」471c2-4: 復た次に四正勝とは、是れ假に名・想・言説を建立して、謂わく正勝と爲す。殞伽沙を過ぐる佛及弟子の、皆な共に是の如きの名を施設するが故に。²²

當箇所にはこれ以上の説明が無いため不明瞭であるが、個々の修行の法も名稱にすぎないことを示唆している。

さてこのように、ある概念に對して假名などを見なすことは、『成實論』の特徴でもある。「四大假名品」においては、四大が假名 prajñapti であることを次のように示す。

『成實論』「四大假名品」261c7-9: 又た若し人、堅等は是れ大なりと説かば、是の人は則ち堅等を以て色等の所依と爲す。是れ則ち依有り主有り。是れ佛法に非ず。故に知る。四大は皆な是れ假名なり。²³

また「立假名品」では²⁴、經典を引用して、

『成實論』「立假名品」327a16-20: 又た佛の諸の比丘に語るが如し。「諸法は無常・苦・空・無我なりと。衆緣従り生じて決定の性無し。但だ名字の

22 『法蘊足論』471c2-4: 復た四正勝者、是假建立名・想・言説、謂爲正勝。過殞伽沙佛及弟子、皆共施設如是名故。

23 『成實論』261c7-9: 又若人、說堅等是大、是人則以堅等爲色等所依。是則有依有主。非是佛法。故知。四大皆是假名。

24 「立假名品」の説く假名心 prajñapticitta については、桂紹隆（Katsura 1979）參照。

み有り、但だ憶念のみ有り、但だ用のみ有るが故なり。此の五陰に因りて種種の名を生ず。謂わく衆生・人・天等なり」と。此の經中には實有の法を遮すが故に、但だ名有りと言うなり。²⁵

と述べている。すなわち、あらゆる事柄が無常・無我であり、ただ假名のみがあると見なす佛説を強調する。また「死想品」においては、不淨觀を説明したのちに、次のように説く。

『成實論』「死想品」350c7-9: 問うて曰わく。若し衆生を離れて死相有らざんば、衆生は是れ即ち假名なれば、行者は何が故に此の想を修習するや。答えて曰わく。衆生相を壊せずんば死を怖畏す。²⁶

つまり對論者に、衆生を離れて死相がなく衆生も假名だというならば、なぜ死相を觀察するのかと問われ、衆生の相を不淨觀によって壊さなければ死を恐れることになるという。なお『順正理論』でもただ假名有りとする主張を譬喩師説と明示している²⁷。

以上のように、ただ「名稱」と見る方法は、譬喩者説にも確認することができる。この淵源には無所緣説を主張した『識身足論』の目連説や分別説部の所説が関わっているのであろう²⁸。『聲聞地』が『法蘊足論』に基づいたというよりも、こうした傳承や教義を共有していたと言った方が適切かもしれない。

25 『成實論』327a16-20: 又如佛語諸比丘。諸法無常・苦・空・無我。從衆緣生無決定性。但有名字、但有憶念、但有有用故。因此五陰生種種名。謂衆生・人・天等。此經中遮實有法、故言但有名。

26 『成實論』350c7-9: 問曰。若不離衆生有死相者、衆生即是假名、行者何故修習此想。答曰。不壞衆生相者、怖畏於死。

27 『順正理論』367b24-28: 譬喩部師。…唯法因果。實無作用。爲順世情假興言說、眼名能見識名能了。智者於中不應執著。(譬喩部師は…唯だ法と因果有るのみ。實に作用無し。世情に順じて假に言說を興し、眼を能見と名け識を能了と名づくと爲す。智者は中に於いて應に執著すべからず。)

28 原田和宗(1996, 150-151)は、『成實論』の無所緣説はすでに『識身足論』における目連説として主張されているため、『瑜伽師地論』の同様の説の源泉を譬喩者説に求める必要はないと明言する。

『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性：止觀を中心として（阿部）

ただし『法蘊足論』が四正勝や四神足の説明の直後にその修行法をただ「名稱」のみと示しており、『聲聞地』の五停心觀における説明と重なることは注目すべきである。

さて『聲聞地』の緣性緣起觀の理 *yukti* の説明も確認しておこう。ここでは、次のように『勝義空性經』(*Paramārthaśūnyatā*)²⁹の文言を用いて、十二緣起の各支の主體は無く、それらは個人を指示する名稱に過ぎないことを説く。

ŚrBh III, 58-59: *sa punaḥ pravacinoti / "asti karmāsti vipākaḥ, kāraḥ kaṣṭhaḥ, kārakaḥ tu nopalabhyate, yaḥ kartā vā pratisaṃvedako vā syān nānyatra dharmasaṃketāt / teṣv evāvidyāpratyayeṣu saṃskāreṣu yāvaj jātipratyaye jarāmarāṇe saṃjñā prajñaptir vyavahārah 'kāraḥ kaṣṭhaḥ' ity / 'evaṃnāmā evaṃjātya evaṃgotra evamāhāra evaṃsukhaduḥkhaḥ pratisaṃvedy evaṃdīrghāyur evaṃcirasthitika evamāyuparyanta' ity /*

彼はさらに思擇する。「業があり、異熟がある。しかし法に對する協約的表現以外に、行爲者あるいは經驗者となりえる、行爲主體は認められない。ほかならぬそれらの無明を緣とする諸行、乃至、生を緣とする老・死に對して、『行爲者、經驗者』という名稱、假名、言説がある。〔また〕『このような名前で、このような生まれで、このような種姓で、このように食べ、このように樂苦を経験し、このように長壽で、このように久しく住み、このような命終である』と〔いわれる〕」。

このように前半では『勝義空性經』の經文を用い、法には協約的表現 *saṃketa* がある以外に主體はないと示す。そして十二緣起の法は「行爲者、經驗者」や「このような名前で、このような生まれで…」と、名稱 *saṃjñā*・假

目連とは第三結集を指導し『識身足論』で過未無體説と無所緣説を主張した目連 Moggaliputta Tissa のことであり、分別説部 Vibhajyavādin を形成したと傳えられる。『法蘊足論』と近似する *Vibhaṅga* はこの分別説部の論書とされている（山田龍城 1959, 69）。
29『勝義空性經』の梵文テキストは、松田和信（2019）および宮下晴輝（1986）を参照。漢譯は『雜阿含經』335 經、『增一阿含經』六重品 7、施護譯『佛說勝義空經』T. 655 に相應する。

名 prajñapti・言説 vyavahāra にすぎないと觀察すべきであると述べる。ちなみに、後半の引用は『人契經』(Māṇuṣyakasūtra; 『雜阿含經』306 經に相應)の一節である。『俱舍論』「破我品」にも次のような引用がある。³⁰

AKBh, 465. 10-17: "skandheṣv eva pudgalākhye"ti māṇuṣyakasūtram / ... "atrāyaṃ vyavahāra ity api 'sa āyusmān evaṃnāmā evaṃjātya evaṃgotra evamāhāra evaṃsukhaduḥkhaḥpratisaṃvedy evaṃdīrghāyur evaṃciraśthitika evamāyuhparyanta' iti / iti hi bhikṣavaḥ saṃjñāmātrakam evaitad vyavahāramātrakam evaitat /

「まさに蘊においてのみ、プトガラの名稱がある」と『人契經』〔にいわれる〕。…「これについて次の言説もある。『その長者は、このような名前で、このような生まれで、このような種姓で、このように食べ、このような樂苦を経験し、このように長壽で、このように久しく住み、このような命終である』と。以上、實に比丘たちよ、これはただ名稱のみであり、これはただ言説のみである」〔と〕。

『俱舍論』ではプトガラがただ名稱と言説に過ぎないことを強調するのであり、觀察對象を名稱と見る『聲聞地』とは文脈が異なる。だが同じ經文を引用していることは注目に値する。よって『法蘊足論』『成實論』『聲聞地』と『俱舍論』の作成には同様の教説を共有するような背景があったと推察できる。

なお、有部内における譬喩者／經量部と瑜伽行派の關係性についてはこれま

30 『雜阿含經』306 經, 88a2-5: 彼施設又如是言說。是尊者、如是名、如是生、如是姓、如是食、如是受苦樂、如是長壽、如是久住、如是壽分齊。

なお、バーリニカーヤには相應する經典は見られない。本庄良文(2014, 890; 905) 參照。『俱舍論』にも『聲聞地』と同様に『勝義空性經』の引用があることは知られている。『人契經』引用箇所後に次のような引用がある。

AKBh, 468. 22-24: sūtra eva hi pratikṣiptaṃ bhagavatā paramārthaśūnyatāyām / "iti hi bhikṣavo 'sti karmāsti vipākāḥ kāraṇas tu nopalabhyate / ya imāṃś ca skandhān nikṣipati anyāṃś ca skandhān pratisandadhāty anyatra dharmasaṃketād" iti / (なぜなら〔プトガラが生まれるという考えは〕、まさしく『勝義空性』という經典において、世尊によって棄却されたからである。「このように比丘たちよ、業があり、異熟がある。しかし法に對する協約的表現のほか、これらの諸蘊を捨て、他の諸蘊と結びつく行為主體は認められない」と。)

『聲聞地』と『法蘊足論』の関連性：止観を中心として（阿部）

でも多くの議論があるものの、具体的にどのような関係をもって活動していたのかは未だ解明されていない。『法蘊足論』が有部における諸法の整合化が本格化する前の論書であることを考慮すると、『聲聞地』『成實論』は主流派の阿毘達磨とは異なるこうした古い有部の教理の上に自らの主張を重ねた可能性もあるように思う。

(4) 光明想

最後に『聲聞地』「第三瑜伽處」修作意章を確認したい。ここでは、止観の修習によって心一境性を得るまでのプロセスを説明しており、このなかで光明想という独特な方法を取り入れている。まず止観に入る前に次の五種の相を修すべきであるという。

(i) 厭離相（嫌悪されるべき相）すなわち世間の様々な事柄を対象として取り、それを遠離するように観察する。

(ii) 次に欣樂相（喜ばれるべき相）を取り、自らの戒の清浄などを対象とする。

(iii) 次に過患相として世俗的な尋思や五蓋等を遠離する。

(iv) 續いて光明相 *ālokanimittam ud-√grh* として、燈明・炎・日輪・月輪から光明の相を捉える³¹。これは、續く了別事相で事物の相を観察する前に心を明るくしておく意味合いがあろう。

(v) そして了別事相（事物の色彩の相）を取り、不浄観の場合は墓地（死體置き場）で死體の相を捉え、墓地でなければ、繪や木・石・泥でつくられたものから相を取るという。

こうして不浄観の相を取った修行者は、阿練若や樹下へ行き、結跏趺坐をし、身體端正にして、對面する念に心をとどめて座る³²。そこで、次の作意を行う。

31 *ŚrBh* III, 126-127: *evaṃ nimittam udgrhya punar aparaṃ cālokanimittam udgrhāṇa, yaduta pradīpād vā, agniskandhaprabhāsād vā, sūryamaṇḍalād vā, candramaṇḍalād vā /*

（このように、相を取ったのち、また別に、光明相を取れ、すなわち、燈明から、あるいは炎の明かりから、あるいは日輪から、あるいは月輪からである。）

32 對面の念については Kritzer (2017, 30-36) に『婆沙論』との相違が示されている。

- (i) 散亂と不散亂に集中する。
- (ii) それから止に入る。無相無分別を獲得し、相・尋思・隨煩惱を離れる。
- (iii) 次に、觀に入る。まずは勝解作意として、不淨なる體內と死體を觀察する。續いて眞實作意を行い、前際以來の自らの死體が量りしれないことを觀察する。
- (iv) そして、觀と止を交互に繰り返す。對象に心が喜び明瞭となり、力づくで心を向けようなら觀を續け、觀が力づくになるようであれば、止によって心を寂靜にする。このとき心に有る相を消去し vibhāvayati、現前させないが anābhāsagatāyām sthāpayati、完全に除去するのではなくそれを所縁としながら無相無分別に心を安定させる。そして、さらに光明相 ālokanimitta を作意するとして以下のように述べる。

ŚrBh III, 138-139: sa punaś copadiśyate / "yat te bhadramukha pūrvam evālokanimittam udgrhītam, tat tvaṃ śamathapakṣaprayoge 'pi manasikuru, vipaśyanāpakṣaprayoge 'pi / ālokaśahagatena cittena, saprabhāśasahagatena, prabhāsvareṇānandhakāreṇa śamathavipaśyanām bhāvaya / evaṃ ca te śamathavipaśyanāmārga ālokaśamjñām bhāvayataḥ, saced ādita eva avipaśṭo 'dhimokṣo bhaviṣyaty ālambane mandābhāśaḥ, sa tena hetunā tena pratyayena, bhāvanābhyāsād viśpaṣṭatā bhaviṣyati, prācurābhāsatā ca /

また、彼はさらに教示される。「賢首よ、汝が以前に取った光明相を、汝は止に屬する行においても、觀に屬する行においても、作意せよ。光明を伴い、光輝を伴い、明瞭で暗闇のない心によって止と觀に専心せよ。そして、このように止と觀の道において光明想を修習している汝にとって、もし、まさに最初に勝解が明確でなく、所縁において漠然とした顯現をもつなら、その因により、その縁により、それは、修習を度々行つたあとに、明確で、多く顯現をもつ状態となるであろう」。

つまり光明の觀察には二段階がある。最初の光明相を對象として取る

『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性：止觀を中心として（阿部）

ālokanimittam ud-√grh 段階では、外界の光明の相を捉え、それから不淨觀に入るが、次の光明想 ālokaśamjñā では止觀を繰り返すなかで、心のなかに光明を形成して、勝解を明瞭、鮮明な状態にすることを説いている。

光明想は初期經典より昏沈睡眠蓋を除くものとされ、修行者が一般的に行う冥想であったと思われるが、止觀のプロセスのなかにこれを入れる修行を説くものは見つかっていない³³。だが『法蘊足論』「修定品」でも止觀とともに光明想を修すことを示している。次の通りである。

『法蘊足論』「修定品」490a11-b5: 云何が光明定の加行にして、何の加行を修して光明定に入るや。謂わく、此の定に於いて初めて修業する者は先ず應に善く淨月輪の相を取り、或は復た善く淨日輪の相を取り、或は復た善く藥物・末尼・諸天宮殿・星宿の光明を取り…隨って一種の光明の相を取り已りて審諦に思惟・解了・觀察・勝解・堅住して、而も之を分別するに、彼の爾の時に於いて、若し心散亂して餘の境に馳流し、一趣なること能はず、守念すること能はざるを、一緣に住せしめ、取る所の諸の光明相を思惟す。…彼の此の道に於いて生じ已り修習し多く修習するが故に、便ち心をして住・等住・近住・安住・一趣・等持・無二・無退ならしむ。…云何が名づけて光明定想と爲す。謂わく、即ち前の光明定に依止して、前の如き諸の光明相を思惟し、諸の想・等想・解了・取像・已想・當想するを光明定の想と名づけ、此の光明定想を光明想と名づく。³⁴

すなわち、下線部のようにまず外界の光明の相を取り、その後に太字のように「審諦に思惟・解了・觀察・勝解・堅住する」すなわち觀を行い、さらに

33 阿部貴子（2018）参照。

34 『法蘊足論』490a11-b5: 云何光明定加行、修何加行入光明定。謂於此定初修業者、先應善取淨月輪相、或復善取淨日輪相、或復善取藥物末尼諸天宮殿星宿光明、…隨取一種光明相已、審諦思惟解了觀察勝解堅住、而分別之、彼於爾時、若心散亂馳流餘境、不能一趣、不能守念、令住一緣、思惟所取諸光明相。…彼於此道生已修習多修習故、便令心住等住近住安住一趣等持無二無退。…云何名爲光明定想。謂即依止前光明定、思惟如前諸光明相、諸想等想解了取像已想當想名光明定想、此光明定想名光明想。

「心をして住・等住・近住・安住・一趣・等持・無二・無退ならしむ」すなわち止を行い、それを繰り返す多々修習する。これにより二重線部のように光明による想を心に定着させる。これを光明想という説明する。

以上、『聲聞地』と同じように二段階の光明想を示す經論はこのほかに見られない。したがって、この點についても『法蘊足論』と共通性があるといえよう。

3. まとめ

『聲聞地』は、『修行道地經』『サウダラナダ』と多くの接点を持っている。『修行道地經』からは五停心觀の枠組みや「第四瑜伽處」における世間・出世間道という骨格について、そして『サウダラナダ』からは「第一瑜伽處」に見られる比丘の修行について大きく影響を受けたことが知られている。阿毘達磨論書に関しては、項目や法數で補強するなど所縁の細部を説明するケースで、『集異門足論』『婆沙論』との共通点も認められる。

だが今回の考察により、『聲聞地』はその構成や、止觀の理論形成の極めて重要な、とりわけ獨自性のある部分で『法蘊足論』と共通していることが分かる。『法蘊足論』は他の阿毘達磨論書と異なり「修行段階論」という見方もなされており、『聲聞地』の作者がヨーガ理論を構築する際に『法蘊足論』の考え方を導入するのは不自然ではないと思われる。

ただし『聲聞地』が『法蘊足論』の文面を直接利用したとは斷言できない。おそらく有部内には瑜伽師とされる人々や譬喩者などのように、諸法の合理的體系化を擔う主流派とは異なる立場の者たちがいた。こうした諸學派との交流のなかで、『聲聞地』の作者たちは次第に『法蘊足論』が唱えたような古いタイプの體系—すなわち一人の求道者が優婆塞になり、比丘になりその威儀を正し、修行者としてヨーガを實踐するという方法論—に依據し、またそれを刷新する必要性から、自説を組み立てていったのではないかと考える。

テキストと略號

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya*. See Pradhan 1967.
DhskD *Dharmaskandha*. See Dietz 1984.
SauN *Saundarananda*. See 松濤誠康 1957/1981.
ŚrBh I 「第一瑜伽處」 See 聲聞地研究會 1998.
ŚrBh II 「第二瑜伽處」 See 聲聞地研究會 2007.
ŚrBh III 「第三瑜伽處」 See 聲聞地研究會 2018.
Vibhaṅga *The Vibhaṅga, being the second book of the Abhidhamma pitaka*. ed. Rhys Davids. London: PTS. 1978.

参考文献

Cha, Sangyeob

- 2013 "The *Yogācārabhūmi* Meditation Doctrine of the 'Nine Stages of Mental Abiding' in East and Central Asian Buddhism." In *The Foundation for Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*. Harvard Oriental Series 75. ed. Ulrich Timme Kragh: 1166-1191. Cambridge: Harvard University Press.

Deleanu, Florin

- 2006 *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi, A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study*, I, II. Studia Philologica Buddhica, Monograph Series XXa-b. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

Demiéville, Paul

- 1954 "La *Yogācārabhūmi* de Saṅgharakṣa." In *Bulletin du l'École française d'Extrême-Orient* XLIV (2): 339-436.

Dietz, Siglinde

- 1984 *Fragmente Des Dharmaskandha: Ein Abhidharma-Text in Sanskrit Aus Gilgit*. Gottingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Kritzer, Robert

- 2017 "*Aśubhabhāvanā* in *Vibhāṣā* and *Śrāvakabhūmi*." In *Śrāvakabhūmi and Buddhist Manuscripts*. ed. Seongcheol Kim and Jundo Nagashima: 27-60. Tokyo: Nombre.

Pradhan, Prahlad

- 1967 *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute.

Schmithausen, Lambert

- 1970 "Zu den Rezensionen des Udānavargaḥ." In *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 14: 47-124.

- 1987 "Beiträge zur Schulzugehörigkeit und Textgeschichte kanonischer und postkanonischer buddhistischer Materialien." In *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur*. Teil 2. ed. Heinz Bechert: 304-403. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

阿部貴子

- 2011 『『聲聞地』のヨーガーチャーラyogācāra』『智山學報』60: 21-47.
2018 『『聲聞地』の不淨觀～光明想を再考する』『印度學佛教學研究』67-1: 140-146.

荒牧典俊

- 1971 「インド佛教から中國佛教へ：安般守意經と康僧會・道安・謝敷序など」『佛教史學』15-2: 1-45.
1983 「瑜伽行者の修行道體系の展開と轉依思想について」大谷大學講演資料.

石田一裕 (Ishida Kazuhiro)

- 2017 "On the Śrāvakabhūmi, Early Abhidharma and Gandhāra Buddhism." In *Śrāvakabhūmi and Buddhist Manuscripts*. ed. Seongcheol Kim and Jundo Nagashima: 95-108. Tokyo: Nombre.

小谷信千代

- 1995 「五停心觀の成立過程—釋尊の「法思想」の眞意を求めて—」『大谷大學研究年報』46: 47-100.
1996 「禪經における瑜伽行者—大乘に架橋する者—」『佛教學セミナー』63: 22-34.
2000 『法と行の思想としての佛教』文榮堂書店.

榎本文雄 (Enomoto Fumio)

- 1989 "Śārīrārthagāthā: A Collection of Canonical Verses in the Yogācārabhūmi. Part 1: Text." In *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen*, Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden: 17-35. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

桂紹隆 (Katsura Shoryu)

- 1979 "Harivarman on satyadvaya" 『印度學佛教學研究』27-2: 1-5.

佐久間秀範 (Sakuma Hidenori)

- 1990 *Die Āśrayaparivṛtti-Theorie in der Yogācārabhūmi*, I, II. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
2009 「インド瑜伽行派諸論師の系譜に關する若干の覚え書き—彌勒・無着・世親—」『哲學・思想論集』35: 17-51.

櫻部建

- 1969/1975 『俱舍論の研究 界・根品』法藏館.

釋惠敏

- 1994 『『聲聞地』における所縁の研究』山喜房佛書林.

『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性：止觀を中心として（阿部）

聲聞地研究會

- 1998 『瑜伽論聲聞地 第一瑜伽處—サンスクリット語テキストと和譯—』 山喜房佛書林. (ŚrBh I)
- 2007 『瑜伽論聲聞地 第二瑜伽處 付 非三摩呬多地・聞所成地・思所成地—サンスクリット語テキストと和譯—』 山喜房佛書林. (ŚrBh II)
- 2018 『瑜伽論聲聞地 第三瑜伽處—サンスクリット語テキストと和譯—』 山喜房佛書林. (ŚrBh III)

田中教照

- 1993 『初期佛教の修行道論』 山喜房佛書林.
- ツルティム・ケサン・小谷信千代
- 1991 『佛教瑜伽行思想の研究』 文榮堂書店.

原田和宗

- 1996 「〈經量部の「單層の」識の流れ〉という概念への疑問 (I)」『インド學チベット學研究』 1: 135-193.

藤田祥道

- 1988 「九種心住について」『印度學佛教學研究』 37-1: 63-65.

本庄良文

- 2014 『俱舍論註ウバーイカーの研究 下』 大藏出版.

松田和信 (Matsuda Kazunobu)

- 1986 *Newly Identified Sanskrit Fragments of the Dharmaskandha in the Gilgit Manuscripts*. Sanskrit Fragments Transliterated by Kazunobu Matsuda, with an Appendix by Hajime Sakurabe. Kyoto: Bun'eido.
- 2019 「三啓集における勝義空經とブッダチャリタ第16章」日本印度學佛教學會 第70回學術大會發表資料.

松田愼也

- 1989 「『修行道地經』の説く安般念について」『印度學佛教學研究』 37-2: 18-23.

松濤誠康

- 1954/1981 「瑜伽行派の祖としての馬鳴」『端正なる難陀』 山喜房佛書林: 158-181.
- 1957/1981 『端正なる難陀』 山喜房佛書林.

宮下晴輝

- 1986 「『俱舍論』における本無今有論の背景—『勝義空性經』の解釋をめぐって—」『佛教學セミナー』 44: 7-37.

向井亮

- 1985 「『瑜伽師地論』の攝事分と『雜阿含經』: 『論』所説の〈相應アーガマ〉の大綱から『雜阿含經』の組織復原案まで 附『論』攝事分—『經』對應關係一覽表」『北海道大學文學部紀要』 33 (2): 1-41.

毛利俊英

- 1987a 「『聲聞地』の修行道」『龍谷大學大學院研究紀要』 8: 17-33.

1987b 「『聲聞地』の修行道體系について」『印度學佛教學研究』35-2: 71-73.

山田龍城

1959 『大乘佛教成立論序説』平樂寺書店.

山部能宣 (Yamabe Nobuyoshi)

1997 "An Shigao as a Precursor of the Yogācāra Tradition: A Preliminary Study" 『渡邊隆生教授還暦記念論文集：佛教思想文化史論叢』永田文昌堂: 785-826.

2003 "On the School affiliation of Aśvaghōṣa: "Sautrāntika" or "Yogācāra"?" In *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 26: 225-254.

2016 「アーラヤ識説の實踐的背景について」『東洋の思想と宗教』33: 1-30.

2017 「身心論の觀點からみた瑜伽行派の人間觀」『日本佛教學會年報』82: 165-187.

2020 "*Ālayavijñāna* in a Meditative Context." In *Mārga: Paths to Liberation in South Asian Buddhist Traditions*. ed. Cristina Pecchia and Vincent Eltschinger: 249-275. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

山部能宣・藤谷隆之・原田泰教

2002 「馬鳴の學派所屬について—Saundaranandaと『聲聞地』の比較研究—(1)」『佛教文化』12: 1-65.

和辻哲郎

1962 「原始佛教の實踐哲學」『和辻哲郎全集』5, 岩波書店.

〈キーワード〉『瑜伽師地論』、『聲聞地』、『法蘊足論』、阿毘達磨、止觀